



関東大震災から100年

関東大震災が発生したのは、大正12年（1923年）9月1日11時58分です。今年2023年で100年が経過しました。そこで、今回は、関東大震災について振り返ってみました。¹⁾



○これまでの大きな地震との比較

関東大震災以降にも日本国内では大きな地震が起きています。その中でも近年の二つの大震災「阪神・淡路大震災」及び「東日本大震災」と比較して表にまとめました。

	関東大震災	阪神・淡路大震災	東日本大震災
発生年月日	1923年9月1日 土曜日 午前11時58分	1995年1月17日 火曜日 午前5時46分	2011年3月11日 金曜日 午後2時46分
地震規模	マグニチュード 7.9	マグニチュード 7.3	マグニチュード 9.0
震源地	相模湾西部（深さ23km）	淡路島北部（深さ16km）	三陸沖（深さ24km）
地震メカニズム	海溝型 相模トラフ	断層直下型 野島断層	プレート境界型 太平洋プレート
直接死・ 行方不明者	約10万5千人 （うち焼死 約9割）	約5千500人 （うち窒息・圧死 約7割）	約1万8千人 （うち溺死 約9割）
災害関連死	－	約900人	約3,800人
全壊・全焼住家	約29万棟	約11万棟	約12万棟

○関東大震災の特徴

発生した時刻と曜日から土曜日のお昼直前ということで、昼食の準備に火を扱う時間帯で火災による被害が多かったことが災害の特徴として挙げられます。当時は、かまどや七輪を使い煮炊きを行うことが一般的で、裸火を扱っている時間でした。そのため当時の東京市では、火事が市内で同時に発生しています。178ヵ所で発生したとされる火事は、83ヵ所は消し止められたとされますが、95ヵ所は延焼することになりました。また、東京市内の学校、研究所内では、倒壊した薬品棚が原因となった火事も多発しました。そして、東京市は強い風が吹いていました。同時間に日本海から東北に向け台風が進んでいたため、太平洋側から風速10m以上の強風が吹き、延焼が広がりました。

市内の住民は住居の倒壊による被災から免れると開けた場所に避難を始めました。当時の開けた場所として、上野公園（50万人）、宮城前公園；皇居（30万人）、浅草公園（7万人）、靖国神社（5万人）、芝公園（5万人）、墨田区の被服工廠跡（4万人）などに避難をしましたが、地震発生から1時間から2時間ほどが経過したところで、住民は倒壊した住居から家財道具を持ち出して、近くの広場へ避難しました。墨田区の被服工廠跡は4万人の市民が避難しましたが、周囲はすでに北側、東側、南側から同時に火事が迫り、他に逃げることはできない状況でした。そこに西側の隅田川対岸にあった東京高等工業学校の火事から発生した火災旋風が隅田川を越えて、被服工廠跡を襲いました。避難者が持ち込んだ家財道具や運搬に使われた木製の大八車などが燃え上がることになり、火災旋風は激しくなり、高温と強風により3万8千人もの命が失われました。火災旋風の発生メカ

ニズムについては、現在も原因はわかっておりません。墨田区横網町に東京都慰霊堂が設けられ、1945年の東京大空襲の被災と共に当時の記録が残されています。

火災の被害に注目されがちですが、当時の区分では震度6（現在では震度7相当）の大きな揺れが相模湾の西部で発生したことから、津波や土砂崩れも神奈川県、千葉県で発生しています。津波は地震発生から5分ほどで神奈川県の相模湾周辺や千葉県南房総周辺に到達しており、6m以上の津波が押し寄せています。当時の千葉県館山町周辺は、津波と土地の液状化で家屋の99%が倒壊しました。また、土砂崩れによる被害も甚大でした。神奈川県秦野市と中井町にまたがる震生湖は、震災の土砂崩れで川が堰き止められてできた湖です。神奈川県小田原市の東海道線根府川駅は大規模な土砂崩れで、駅周辺と走行中の列車が海に流される事故も発生しました。現在の根府川駅には2番線から4番線まではありますが、1番線は無いままです。

○風評による人的な被害

東京市でラジオ放送が始まるのは2年後の1925年です。当時情報を入手する方法は、電信、電話、新聞しかありませんでした。震災発生により報道、通信機関は機能を停止しました。その状況では、口伝えが情報を得る手段となり、そのことが原因で悲惨な人的な被害が発生しました。

地震とその後起きた大火災により、貴重な飲み水である井戸や池の水の濁り、火災による爆発や飛び火による延焼等が、一部の人による爆弾投擲、放火、毒を流すことで起きたとする、根拠のない流言、風評が拡がりました。社会主義者などの過激思想への嫌悪、外国人への排斥等に結びつくことにより、差別意識から朝鮮人、中国人、日本人を殺傷、虐殺することも発生してしまいました。

○関東大震災の教訓

総務省の「1923 関東大震災」報告書には、「おわりに ～関東大震災（第1編）の教訓～」として以下の内容が書かれています。²⁾

- 1 当時の人々の想定を超えた災害であり、対応する体制を欠いていたことが被害を拡大した。
- 2 技術進歩を過信し、特に都市で災害への体制が低下していた。
- 3 災害の全貌が把握できず、そのことが対応を遅らせ、また人々の恐怖を煽った。
- 4 救護上重要な施設の喪失や偏在が救護を遅らせ、あるいは偏らせた。
- 5 実際の救護においてはボランティア的な民間の活動が果たした役割が大きかった。
- 6 流言が殺傷事件を招くとともに、救護にあてるべき資源と時間を空費させた。

災害は形を少しずつ変え、必ず起きます。教訓として全員で備えることが改めて必要なことです。

【参考にした情報】

- 1) 「関東大震災 100 年」特設ページ；内閣府

<https://www.bousai.go.jp/kantou100/>

- 2) 災害教訓の継承に関する専門調査会報告書

平成 18 年 7 月 1923 関東大震災；内閣府

https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/rep/1923_kanto_daishinsai/index.html#document1

